

滋賀中央信用金庫

[テーマ]: 「人が育つ ～慮る心を～」

[講師]: 勝城 弘志 氏

[開催日時]: 平成 30 年 11 月 8 日 (木)
16:00 ～ 17:00

[会場]: 滋賀中央信用金庫

[参加者]: 41 名



講話の内容

○おたまじゃくしは蛙の子

おたまじゃくしは蛙の子、猫の子は猫の子、では人はと小学校低学年児童に尋ねると人と答えが返ってくる。そのことを小学校高学年児童に尋ねると、人間と答える児童も見られる。「人は人によって人になる」と言われる。この人とは＝家庭・地域・学校等のことである。

○子どもを取り巻く環境を考える

- ・環境が人を育てる

言葉は、人と人をつなぐ大切なツールなはずなのに、環境の変化が言葉の変化（心をつなぐ言葉から衝動的な単語的会話へ）をもたらした。

- ・言語環境がもつ大きな力＝家庭・地域における言語環境の力

吉田 羊さんの言葉

「本でたくさんの言葉を吸収すると、人の心がくめるようになると思う。私、同じ言葉を使うなら人を幸せにする言葉を使いたいです。」

- ・課題となる言葉かけ（子どもの心の奥底を思いやらない言葉となることがある）

「頑張れよ」の怖さ、頑張り続けようとするが、頑張りきれない

→親の期待に応えられない私＝情けない自分、値打ちのない私

→引きこもり、自傷行為につながりやすい

「早く、早く」で追い詰める

→待つことが重要なため、余裕が必要です

「あんたのためを思って・・・」

→言われた本人は、言われなくても分かっていると思う

「ほらみなさい。だから言ったでしょ」

→失敗したことは自分がよくわかっている。十分傷ついている。

何で駄目押しをするのか。

小さいうちは反発しませんが、こうした言葉では、「不信感」「劣等感」「無力感」等が育ってしまうのではないか

○「温かな・豊かな言葉」は慮る心から

- ・ 勇気をもたせる言葉かけを
子どもの心の奥底に潜んだ思いへの寄り添いを大切にし、慮る心をもって
- ◎「認める・褒める」言葉かけが大切
「ありがとう。よくやってくれたね」＝自己有用感が高まる＝またやるぞ

- ・ 温かな言葉が小さな勇気を育てる
人が人として生きていくためには、「小さな勇気」が大切だ。「小さな勇気」とは、「話してみよう」「関わってみよう」「試してみよう」等、「小さな勇気」を発揮しているところを認める環境（褒める言葉の多い環境）にしましょう。

○「慮る心」は暮らしの余裕から

- ・ 子どもをしっかりと観る
ばたばたしていると観られません。余裕は、「働き方」を見直すことから生まれます
＝ワークライフバランス

○「慮る心は子どもを育てるだけではない」

商売は「慮る心」を大切にすることが軸である＝確かな「信頼関係が出来上がる＝あの会社なら、あの人なら

配慮・思慮・苦慮・遠慮・浅慮・熟慮等

○故郷を人を育てる環境に

自然が人を育てます

人が人を育てます

故郷（家庭・地域の環境）が人を育てるのです

参加者の感想

- ・ 生活の中で、言葉は必ず使うものであるし、どんな言葉を使うかで環境は変わると思いました。子どもに豊かさを与えるには、豊かな言葉で生活することが大事。生活をしているとついつい、その場しのぎの言葉（早くして、自分でやってよ等）しか子どもに伝えてないように思います。改めて考えないといけないと思いました。褒めるというのは、なかなか子どもに対しても照れて使いにくいと思いますが、細やかなことでも、「できたね」小さな手伝いとかでも、「ありがとう」「助かったわ」と言うようにしていますが、さらに伝えていこうと思いました。
- ・ 小学生の女の子二人の子どもがいます。私も仕事に行って帰って家事におわれてしまう毎日で、子どもたちとゆっくり話したり、見てあげたりする時間がないと思い、ゆっくり話を聞いてあげられなかったり、ちょっとまってと話をとめたりと、反省することがたくさんあります。こんなふうに接してはいけないと思っていたのに、今少し忘れていました。今日のお話を聞いて今日からでも接し方を変えていきたいと思いました。大変ためになりました。楽しくわかりやすい話でした。ありがとうございました。
- ・ 慮る心は、暮らしの余裕からという御指摘は、改めてそのとおりだと思いました。日々忙しく立ち回っている自分を反省しました。